

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號六第

卷一十第

論說

地租と地方團體との關係……………法學博士 神戸 正雄

植民地の財政政策に就きて(三)……………法學博士 山本美越乃

地代課稅主義土地改良論者……………法學博士 河田 嗣郎

生計調査を論ず……………法學士 汐見 三郎

價值論上のリカアドとマルクス(三完)……………經濟學士 堀 經夫

時事問題

目下の卸賣相場と小賣相場……………法學博士 戸田 海市

雜錄

英國現代の經濟學者と社會主義……………經濟學士 三田村 一郎

經濟地理學研究に對するグルーベル博士の……………經濟學士 黑 正 巖

竹越氏の「日本經濟史」に就て……………法學士 本庄榮治郎

石澤氏の「本邦銀行發達史」を読む……………法學士 大森 研造

附錄……………本誌第十一卷總目錄……………

價值論上のリカアドとマルクス (三・完)

堀 經 夫

三 立場の相違に基けるリカアドとマルク

スとの價值論の乖離

既述せる所に依り、價值論上に於けるリカアドとマルクスとの關係に對する諸學者の見解を分類して三種となし得ることゝ、余は此等の中に就いて第三種に屬する説、即ちリカアドの價值論とマルクスのそれとは、議論の起點に於て同一であるけれども、兩者の立場が相違せる爲め、結論に於て遂に異なる色彩を帶ぶるに至つたのであるとの説、を以て最も正鵠を得たるものと解することゝを、略説し了へた。本項に於ては、余は更に一步を進めて、然らばリカアドとマルクスの立場に於ける如何なる相違が、兩者の價值論に如何なる乖離を齎したるかを闡明し、以て余が第三説を正當であるとなす所以のものを明かにしたいと思ふ。之れが爲めに余は先づリカアドとマルクスの價值論の各特質を研究する必要がある。

(イ) リカアドの價值論の特質

(A) リカアドの價值論は純粹なる勞働價值の議論を以て始つて居る。此點は殆ど疑を容れない

明白なる事柄である。彼は、人の勤勞によつて増加し得ざる物を除外する限り、他の總ての物の交換價值の眞實の根源は勞働であるとの命題を以て、經濟學に於ける最も重要な一個の學理なりと爲し、而して交換價值の眞實の根源をなす所の勞働とは、貨物の生産に費されたる勞働の意であつて、生産されたる貨物が支配する勞働の意でないことを、明かに説明して居る。彼れの『原論』の第一章の前三節は即ち此等の事柄の解説に費されて居るのである。

余は、本誌前々號に於て『リカアドの價值論の諸要點』を述べたる際に、既に此點に關するリカアドの所説を約言し置きたるを以て、茲に同じことを繰返すの必要を見ない。されば余は今、別種の方面より觀察することによつて、リカアドが其の價值論の出發點に於て純然たる勞働價值の説を懷いて居たことを證明しやうと思ふ。

茲に所謂別種の方面とは、即ち賃金の騰落と價值との關係の問題の意である。蓋し、若し貨物の價值が其の生産に必要な勞働の分量に依つて測定さるゝものであるとするならば、其勞働の分量に變動なき限り、賃金の騰落に拘らず價值は不變であるべき筈であり、而して若し貨物の價值が賃金の騰落によつて左右さるゝものとするならば、それは、價值決定要素として勞働以外の標準を、或は勞働と相並んで他の標準をも、認めたるが爲めであつて、即ち純然たる勞働價值論に據つて居ない爲めである、といふことにならざるを得ないであらう。然らば、リカアドは賃金と價值との關係を如何に解して居るであらうか。

彼は、其著『經濟原論』第一章第一節の冒頭に於て、述べて曰く、

『一貨物の價值は、換言せば其貨物と交換さるゝ或る他の貨物の分量は、其の生産に必要な勞働の相對的分量に依つて定まり、而して其勞働に對して支拂はるゝ報酬の大小に依つては定まらない。』¹⁾

此處に所謂『其勞働に對して支拂はるゝ報酬』とは取も直さず賃金の意であるから、吾々は、リカアドが、貨物の價值と貨物生産に使用さるゝ勞働に對する賃金との間に、何等の必至的因果關係存在せず、その斷案を豫示して、先づ讀者の理解に便せしめたるものなることを、知るのである。

彼は、更に本文中に於て、之と同一の見解を屢々述べてゐる。今其の一二を例示しやう。

彼は、前掲書第一章第三節に於ては、『直接貨物に加へられたる勞働が其の價值に影響するのみならず、斯かる勞働を補助する器具、道具及び建物に下されたる勞働も亦然かする』²⁾ことを説明して居るのであるが、其中に彼は次の如く述べてゐる。

『資本が勞働に比して豊富なるか或は稀少なるかの各異れる事情の下に於ては、即ち人間の生活維持に缺くべからざる食物及び必要品が豊富なるか或は稀少なるかの各異れる事情の下に於ては、同一の資本の價值を一つの職業又は他の職業に提供する人は、取得されたる生産物の半分、四分の一、或は八分の一を得、残りは勞働を提供したる人々に賃金として支拂はれるであらう、而かも此分割は、此等の貨物の相對價值には影響することは出来ない。何故なれば、資本の利潤が多からうと或は少からうと、……或は又勞働の賃金が高からうと低からうと此等は兩方の職業に同様に作用するから。』³⁾

1) Ricardo, Principles, Gonner's edition, p. 5.

2) Ibid. p. 17.

3) Ibid. p. 18.

又彼は同節の他の個所に於て曰はく、

『社會の初期に於て、獵師の弓及び矢は、漁夫の獨木舟及び器具と共に、同じ勞働量の生産物であつて、同じ價值を有し、而して同じ耐久力を有すと假定せよ。かゝる事情の下に於て、獵師の一日の生産物たる鹿の價值は、漁夫の一日の勞働の生産物たる魚の價值と正に同一であらう。魚と鳥獸との相對價值は、全く其の各々に實現せられたる勞働の分量に依つて左右されるのであつて、生産量の大小如何又は一般賃金及び利潤の高低如何に關しないのである。例へば漁夫の獨木舟及び器具は、一〇〇磅の價值を有し、而して一〇年間保つと計算されたりとし、そして彼は一〇名の人を雇ひ、此等の人々の一年間の勞働は一〇〇磅であり、又彼等はその勞働に依つて一日に二〇匹の鮭を漁するものとするならば、次に獵師に依つて使用さるゝ武器も亦、一〇〇磅の價值を有し、而して一〇年間保つと計算されたりとし、そして彼も亦一〇名の人を雇ひ、此等の人々の一年間の勞働は一〇〇磅であり、又彼等は一日に一〇匹の鹿を獲るものとするならば、然る時は、一匹の鹿の自然價格は二匹の鮭であらう、全生産物が之を獲得したる人々に分與さるゝ其割合が大であらうと小であらうと、それには關係なく。(全生産物の中)賃金として支拂はるゝ割合(如何)は、利潤の問題に關し最も重要なものである、何故なれば、利潤が、賃金の低いか又は高らかに正確に比例して高いか又は低いかであることは、直ちに賭易き理であるから。併し此割合は決して魚や鳥獸の相對價值に影響することは出來ないのである、蓋し賃金は双方の職業に於て同時に高く又は低くなるであらうが故に。若し獵師

が、彼れの獲物の大なる部分又はその價值を賃金として支拂ひつゝあるといふことを口實として、漁夫に彼れの獲物と交換してより多くの魚を與へよと誘ふならば、漁夫は、彼も等しく同一の原因の影響を受けたと述べるであらう。かるが故に、賃金及び利潤は如何に變化し、資本の蓄積の効力が如何あるとも、彼等が一日の勞働によつて各自以前と同じ分量の魚や鳥獸を獲り續けて居る限り、交換の率は鹿一匹對鯉二匹の割合である。¹⁾』

又曰はく、

『勞働の賃金に於ける變動は、此等の貨物の相對價值に何等の變動をも生ぜしむることは出來ない、何故なれば、賃金が騰貴したとするも、此等の職業の或るものに於てより多くの勞働量が必要になつたのではなくて、たゞ勞働がより高い價格で報酬を受けるやうになつたまでのことであるから、云々』²⁾

以上引用せる所に依れば、リカアドが賃金と貨物相對價值との間に何等の因果關係を認めなかつたことは明白である。併し乍ら、吾々は、リカアドが其の理由とせる所を仔細に觀察する必要がある。リカアドは、屢々、賃金の騰貴又は下落が貨物の相對價值に影響を及ぼさざることを述べ而して其の理由は、賃金の騰貴又は下落が各職業に於て同様に作用するが故なり、と説明してゐる。即ち例へば、獵師が賃金の騰貴を理由にして、其の鹿一匹と交換して二匹以上の鯉を與へんことを漁夫に要求すなも、漁夫も亦賃金の騰貴を理由として、其の鯉二匹と交換して一匹以上の鹿を與へんことを獵師に要求すべく、斯くて鹿と鯉との相對價值は、賃金の騰貴に拘らず従前通

1) Ricardo, Principles, pp. 20-21.
2) 此等の貨物とは鯉と鹿とを指す。
3) Ricardo, Principles, p. 22.

りとなるであらう、と説明するのである。此説明を一見する時、吾々は、それが貨物の相對價值と賃金との關係に關するものであつて、その絕對價值と賃金との關係に關するものでないことを看取するであらう、而かもそれと同時に、吾々は、貨物の絕對價值こそは此場合賃金の騰貴に依つて騰貴を免れざるべしと思惟し、又リカアドも爾かく思惟せるものと斷定し易いのである。併し乍ら、果して此斷定は正當であらうか。成る程リカアドは、賃金の騰貴又は下落が各職業に於て同時に又同様に作用することを述べ、而して一貨物の所有者が賃金の騰貴を理由として其の價值——絕對價值の意である——を従前より高く評定せんとせること、及び他の貨物の所有者も同様の理由に依つて其の價值を以前より高く評定せんとせることを叙してゐる。されども此は、各貨物の相對價值の不變なることを證明せんが爲めの便宜に出づるものであつて、決してこれによつて貨物の絕對價值の變化を認めた譯ではないのである。此場合に於ては、事實上各貨物の絕對價值も亦變化しない、と解するが、却てリカアドの眞意を得たものであらう。其の理如何と云ふに、『利潤は、賃金の低いか又は高いかに正確に比例して高いか又は低いかである』とのリカアドの所謂『賭易き理』よりして、賃金の騰貴は利潤の下落によつて、又賃金の下落は利潤の騰貴によつて補償せられ、斯くて貨物の價值は、賃金の騰落に拘らず、常に——貨物生産に必要な勞働の分量に變化なき限り——一定點に保たるゝが故である。

以上述べ來りたる所に依り、リカアドは貨物の相對價值が賃金によつて左右さるゝものにあらざることを主張せしことゝ、リカアドの所説を推論するとき、吾々は、貨物の絕對價值——茲に

謂ふ絶対價值がマルクスの所謂狹義の價值に等しきことは嘗て述べた¹⁾も亦賃金によつて左右さるゝものにあらずとの結論に到達せざるを得ないことゝは、明かになつたと思ふ。

斯くて吾々は、賃金の大小如何は貨物の價值——その絶対的意味に於けるとその相對的意味に於けるを問はず——に全然無關係であつて、價值を左右することが出来るものは、貨物の生産に必要な労働の分量のみである、といふがリカアドの價值論の出發點であり且つ其の骨子であることを確證し得た譯である。

此點に關して彼のウィックセルは次の如く述べてゐる。

『……殆ど總ての土地が私有財産となつて居る所の、そうして殆ど總ての生産が資本を必要とする所の、吾々の今日の社會に於て、此處でも亦労働が交換價值の唯一の尺度として觀察されるものであらうか。リカアドは此問題に對して然りと答へる、しかも次の如き考で爾かく答へるのである。

『先づ地代を別にするならば、即ち殆ど地代を支拂はなくてもいい所の、その部門の産業を考へるならば、然るときは其の生産物の價格は、二つの部分即ち労働賃金と資本利潤とに分れる而して假ひ此兩者は何れも、生産に費されたる労働に一致はしなくとも、そは併し——リカアドに従へば——各々獨立して其労働の分量に比例してゐる、斯くの如くにして、貨物の相互の價值即ちその交換價值は結局に於てその產出に必要な労働の分量と同一の比例に定まることになるのである。²⁾』

1) 本誌第十一卷第二號拙稿參照

2) Knut Wicksell, Wert, Kapital und Rente, S. 8.

是に由て觀れば、リカアドは純然たる勞働價值の議論を以て彼れの價值論の根柢となした、とウ
イックセルが考へたことは明かである。

併し乍ら、如上の見解に對しては反對の學説があることを忘れてはならない。リカアドの價值
論を以て勞働價值論とは全然異なる所の價格論であると爲す、彼のベツリーの如き、又リカアドの
價值論を以て最初より相對的勞働價值論を組立つるの目的で構成されたるものであると爲す、彼
のツウガシ・バラノヴスキの如き、或は又、リカアドの價值論が純然たる勞働價值論であるかの
如く誤解することによつて、マルクスの勞働價值論が生れたのであると爲す、彼のマアシャル及
びゴンナアの如き、皆、リカアドの價值論の根柢或は出發點が純然たる勞働價值の議論であると
の如上の主張に對しては、反對の學説を持するものと言はなければならない。蓋し、リカアドは
純然たる勞働價值の議論を其の根柢又は出發點となしたりこの後説は、リカアドが、出發點に於て
抱懷せる此理論を最後まで一貫して主張せんとするの意思を有し又之を主張し得べしと信じた
こと——事實上に於て彼が之を終始一貫せしや否やは問はない——を認むるものなるに反し、ベ
ツリー、バラノヴスキ、マアシャル、ゴンナア等の主張する前説は、説明の方法は異つて居る
けれども、悉く、リカアドは最初より純然たる勞働價值の議論を一貫するの意思なく又一貫し得
べしとも信ぜず、他の價值論の構成を豫見しつゝ只説明の便宜上勞働價值の議論より筆を起した
のである、この有意識的又無意識的の共通觀念を其の根柢にもつて居るが故である。

シャアル・デードは、シャアル・リストとの共著『經濟學說の歴史』に於て、リカアドに就て次の

如く述べて居る。

『……リカアド自身は、精密なる價值説から議論を始め而してそれよりして分配の諸法則を演繹したのではなくて、分配の諸法則を發見したる後に、或は之を發見したりと確信したる後に彼は其等のものから價值説を演繹しやうと試みたのである。彼れの全生涯を通じて一つの思想が附纏つて居た、即ち、時の進むにつれて、自然は、人間の骨折を絶えず増加しつゝ用ふべきことを要求する、といふ思想である。疑もなく、勞働が價值の原因でありそうして其の尺度である、といふことを彼に提言したるものは、此思想であつた。併し乍ら、彼は此問題の最終の決定にまで至らなかつた、而してそれに關する彼れの敘述は屢々矛盾に陥つた。云々』¹⁾

是に由て察するに、デードは、リカアドが純粹なる勞働價值論を一貫し得ざりしことは、當初より既に定まれる事實であつたのであるが、斯論を以て筆を起したるは、『時の進むにつれて、自然は、人間の骨折を絶えず増加しつゝ用ふべきことを要求する』といふ思想に強制されたるが爲めであつて、從て説明が屢々矛盾に陥れるは當然である、と解して居るやうである。是れ余がデードを目して、リカアドの價值論に對する見解に於て、ペンリー、マアシャル等と同一であるとなす所以である。

以上を以て、余は、リカアドの價值論は純粹なる勞働價值の議論を出發點として居るとの説に反對なる學説を略説したべたのであるが、惟ふに此反對説は、リカアドが後に彼れの勞働價值論に加へたる『修正』に餘りに拘泥して、それが最初よりリカアドの價值論の本質をなすべく豫定され

1) Charles Gide et Charles Rist, Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours, English translation, p. 140.

居たるもの、如く解することより起れる謬論であらう。若し論者の主張する如く、リカアドが最初より價值決定要素として労働以外の要素を認めて居たのであるならば、彼は恐らく後に至つて『修正』を施すことをせずして、當初より労働以外の諸要素を説明したであらう。是れ彼が、少くとも其出發點に於て、労働を以て唯一の價值決定要素となさんとしたることの、明かなる證據ではなからうか。

(B) リカアドは、其の最初の意味に反して、純粹なる労働價值の議論に『修正』を施さざるを得なくなつた。余は本誌前々號に於て、茲に所謂『修正』の意義を畧説し且つそれに就てリカアドの與へたる説明を紹介したるを以て、本項に於ては更に一步を進めて、リカアドが『修正』を施すに至つたその根本原因及び其の結果を研究することとする。之れが爲めには先づ利潤なる概念に對するリカアドの見解を觀なければならぬ。

第一に、余は、利潤の大きさは如何にして決定さるゝや、の問題に對するリカアドの解答を検するであらう。

リカアドは、前にも述べたる如く、『利潤は、賃金の低いか又は高いかに正確に比例して高いか又は低いかである』との根本命題に立脚してゐるのである。約言すれば、彼は利潤が賃金と槓杆關係に立つてゐるものと解して居るのである。今左に利潤と賃金との槓杆關係に對するリカアドの説明を譯出することとする。

『利潤の下落がなければ、労働の價值の騰貴は有り得ない。若し穀物が農業者と労働者との間

に分配さるゝのであれば、後者に與へらるゝ部分が大であればある程、前者にはより少し、か残らないであらう。そのやうに、若し布又は綿製品が労働者と彼れの雇傭者とに分配さるゝのであれば、前者に與へらるゝ部分が大であればある程、後者にはより少し、か残らない。『穀物及び製造されたる財が常に同一の價格で賣れるものと假定すれば、利潤は賃金が低いか或は高きかに比例して高く或は低くなるであらう。併し假りに穀物は、それを生産するにより多くの労働が必要であるから、價格に於て騰貴するとせよ、其原因は、その生産に餘分の労働量が必要されない所の、製造されたる財の價格を高めないであらう。然らば、若し賃金が續いて同一であれば、製造業者の利潤は同一に止まるであらう、併し若し賃金が穀物の騰貴と共に騰貴するならば、——此事は絶対に確かであるが、——然らば、彼等の利潤は必然的に下落するであらう。』²⁾

『地代を支拂つた後、資本の所有者及び労働者の間に分割さるべく残つて居る所の、生産物の其部分の大半は、労働者に分けらるゝであらう。各人はより、少い絶對量を得るかも知れない、而して恐らく得るであらう、併し農業者によつて保有さるゝ全生産物に比例してより、多くの労働者が使用さるゝが故に、全生産物のより、大なる部分の價值は、賃金によつて吸収さるゝであらう、而してそれ故に、より、小なる部分の價值が利潤に獻げらるゝであらう。……』

『斯くて吾々は、再び、吾々が以前に樹てんと試みた所と同一の結論に達するのである、——即ち、總ての國及び總ての時代に於て、利潤は、地代を生まない所の、其の土地の上に於て、

1) Ricardo, Principles, p. 23.

2) Ibid. p. 87-88.

又は其の資本を以て、労働者に必要品を給するに要する労働の分量如何によつて定まる、といふことである。¹⁾』

『……斯くの如くにして余は、第一に、賃金の騰貴は貨物の價格を高めないのであらうが、併し常に利潤を低めるであらうといふこと、而して第二に、若し總ての貨物の價格が高められ得ても、尙ほ利潤に及ぼす結果は同一であらうといふことを、……説明せんと試み來つたのである。²⁾』
『利潤率は、賃金に於ける下落によつてにあらすは、決して増加され得ないこと、及びそれに賃金が費さるゝ所の必要品の下落の結果以外には、賃金の永續的の下落はあり得ないといふことを説明するのが、本書を一貫して余の努力であつた。³⁾』

『既に屢々述べた所であるが、猶ほ繰返し注意するの必要あるは、利潤は、賃金に依つて——名目賃金に依らずして、眞實賃金に依つて、又年々労働者に支拂はるゝであらう所の磅の數量に依らずして、此等の磅を取得するに必要な日々の労働の數量に依つて、——定まると云ふことである。⁴⁾』

以上列舉せる所に依り、リカアドが利潤の大小を決定するものは賃金の外なきことを繰返し主張せしことは、疑の無い所である。斯くて吾々は、利潤なるものは、決して、資本家が自由に貨物の價格を高むることによつて増加し得るものではなくて、既に貨物の生産に費されたる労働の分量によつて決定されたる其の價值の範圍に於て、賃金(及び地代)と共に其の組成要素をなすものであるといふこと、換言すれば、貨物の労働價值が、其の生産に使用さるゝ労働に對する賃金を支

1) *Ibid.* p. 104-105.

2) *Ibid.* p. 107.

3) *Ibid.* p. 112.

4) *Ibid.* p. 124.

拂ひたる後、尙ほ殘餘を有するを以て、之を資本家に對する利潤として（及び地主に對する地代として）支拂ふことが出来るのであつて、利潤は價値の大小及び賃金の多少によつて限定されて居るのであるといふことに、リカアドの所論を推し進むることが出来るであらう。蓋し、リカアドに従へば、貨物の價値は其の生産に必要な勞働の分量によつて定まり、而して其價値の中よりして賃金、利潤、地代が支拂はるゝものなることは、既に明白であるから。

之を要するに、利潤の大きさに關するリカアドの所説は、純然たる勞働價値の議論を其の根柢に持するが故に樹て得らるゝのであつて、若し此根柢たる議論が無いとするならば、利潤の大小は賃金や他の諸貨物の價値と共に、單に競争に依つて需要供給の法則の支配の下に決定せらるゝといふことになり、決して賃金の大小如何によつて影響さるゝことゝはならないのであらう。

以上の見解にしてリカアドの眞意を誤り傳ふるものなしとするならば、余は更に之より推理して、貨物の價値は同一であつても、其の生産に従事せる資本家の資本に對する利潤の率は、必らずしも同一でないといふことに考へ及ばざるを得ない、或は又極端なる場合を假想して、若し貨物の價値が小であつて辛うじて賃金を支拂ふに足るものとするならば、——事實上斯かる場合は稀である——資本家に與へらるゝ利潤は全然發生しないであらう、といふことに考へ及ばざるを得ない。蓋し、各資本家の資本は悉く其の構成を異にし、賃金に支拂はるゝ部分の全資本に對する比が種々雑多であるのに、『賃金が大であればある程、利潤にはより少しゝか残らず、又賃金が小であればある程、利潤にはより多く残るであらう』が故に。

右に述ぶる所を以て、利潤の大きさに對するリカードの見解は畧明かになつたことと思ふ。

第二に、余は、利潤は何故に資本提供者に支拂はるゝや、の問題に對するリカードの解答を調べるであらう。

されど吾々は不幸にして、此點に關するリカードの明確なる解答を得ることが出来ないのである。彼は利潤を目して、資本の使用に對して當然支拂はるべき一定の報酬であつて、何等其の存在に關して論議すべき餘地なきものとなして居るやうである。

たゞ彼が、穀物と綿製品との生産に一と二との割合で勞働が費されてゐるにも拘らず、其等のものゝ相對價值の比は一對二とならずして、一對二以上となることの理由を説明して、

『第一年目に於ける……紡績業者の資本に對する利潤は、彼等の資本に附加せられて居るに反し、農業者のそれは費消せられ且つ享樂せられたるが故に』¹⁾

と謂ひ、斯くて第一年目の紡績業者に對する利潤が、直接消費に充てらるゝことなく、節欲せられて資本化したるが故に、それに對して更に利潤が與へらるべきであるとの意を暗に示せるが如き、又同様の事柄を説明する爲に、他の個所に於て、

『(二つの貨物の生産に同一量の勞働が費されて居りながら) 一貨物の價格がより高いのは、それが市場に齎され得る以前に經過しなければならぬ所の時間がより長いからである。……價值に於ける此差は、……利潤が資本として蓄積さるゝことから起るのであつて、而してそは、ただ利潤が自由處分を差止められたる時間に對する正當なる報償に過ぎない。』³⁾

1) *Ibid.* p. 27.

2) 譯者補入

3) *Ibid.* p. 31.

と謂へるが如き、リカアドが利潤に關して節欲説を懷いて居つたことを吾々に語るものゝやうである。併し乍ら、之を以て直ちに、リカアドが利潤存在の理由を節欲説に求めたりとなすは、早計に過ぐと言はなければならぬ。彼は最初より『一定額の資本の放下さるゝ所に必らず一定の平均利潤あり』その命題を自明當然の前提なりと看做して居たのであつて、前述の場合にはたゞ、既に得られたる利潤が費消されずして資本に繰入れられたるが故に、それは當然一定の利潤を生まなければならぬ、だから貨物の價值は、その生産に費されたる勞働の割合以上に出づるのである、といふことを主張したまでのことなのである。

扱て上述せる所に依り、リカアドが利潤存在の理由を殆ど説明することなく、之を以て資本の放下に必らず附隨する所の資本家利得なりと看做したることは、明かであらうが、吾々は、斯かる見解と、前述せる如き利潤の大きさに關する彼れの見解との間に、相容れざる立脚點の相違があることを看過してはならない。蓋し、一定額の資本に對しては必らず一定の利潤が支拂はるべきものである、とする見解よりすれば、生産されたる貨物の價值は、それに費されたる勞働の分量の如何に關せず、必らず一定の賃金と一定率の利潤と（一定の地代と）を含有し得るだけの大きさを有することを要し、従て貨物の價值は、賃金の大きさと利潤の大きさと（地代の大きさと）に依つて始めて決定せらるゝものである、といふことになるに反し、利潤の大きさは賃金の大きさによつて決定さるゝの見解よりすれば、貨物の價值は、既に生産を終りたる時に一定し、それが賃金や利潤や（地

代や)に分割さるゝのである、といふことになるが故である。

此立脚點の相違こそ、リカードをして純粹なる勞働價值の議論に『修正』を施さざるを得ざらしめたる所のものである。惟ふにリカードは、既述せる如く、勞働價值の原則を以て彼れの價值論を終始一貫せんと欲してゐたのであるが、中道に於て、『資本の放下さるゝ所常に一定率の利潤あり』といふ事實より歸納せる命題に捉はれ、之を價值論に採り入れることに依つて、終に此迄辿り來れる道と正反對なる新道に進み入ることとなり、——リカードは勿論之を意識しなかつたであらうが——茲に所謂『修正』の必要を感じ、これに依つて兩道を結び付け得たるものと或は兩道を歩むことより起る矛盾を調和し得たるものと信じたのではなからうか。

『修正』は施された。かくて彼れの價值論は異なる形態を探るに至つた。彼は、マルサスに宛てたる書簡の中に於て次の如く言うてゐる。

『……如何なる原因——余は、永續的原因を意味する——で、此等の變動(貨物の相對價值の變動を指す——譯者註)が起るのであるか。二つの而して只二つの原因によるのである、一は其の結果に於て重要ではないが、賃金の騰貴又は下落、即ち、同じ事であると思ふが、利潤の下落又は騰貴といふことであつて、他は非常に重要なものであるが、貨物を生産するに要求さるゝ勞働の分量の多少といふことである。云々』¹⁾

併し乍ら、『修正』は果して、根本的に相容れざる二個の見解を調和するといふ所期の目的を達し得たであらうか。余は、後にマルクスの價值論の特質を論ずる際に、マルクスと共に此問題に

1) Bonar, Letters of Ricardo to Malthus, p. 175-176.

對する解答を與へ得べしと信するが故に、此處には之を省略するであらう。

たゞ、斯の如くにして、リカアドの價值論が『修正』が施されることによつて、純然たる一元的勞働價值論より、勞働と利潤とを決定の要素とする所の二元的價值論に變化せしことは、否定すべからざる事柄であらう。

以上(A)及び(B)に於て述べし所を通覽するとき、吾々は、リカアドが『一貨物の價值は、其の生産に必要な勞働の相對的分量に依つて定まる』との命題を以て彼れの價值論を始め且つ飽くまで之を根柢として推論せんとしたること、及び彼が後に至つて、『資本放下さるれば必らず一定率の利潤を生む』との命題を不知不識の間に彼れの價值論中に併用することゝなり、かくて本質的な『修正』を其の勞働價值論に加へざるを得ざるに至りしことを以て、彼れの價值論の特質なりと看做すことが出來やうと思ふ。

(□) マルクスの價值論の特質

マルクスの價值論の特質を一言以て蔽ふならば、それが純粹なる勞働價值論で一貫されて居るといふことになるであらうと思はるゝ。

余は嘗て『マルクスの勞働價值論の根本命題』を論じたる際に、既に彼れの價值論上の重要な諸概念を研究した。此等のものがマルクスの價值論を特徴づけることは勿論である。されど今之を再說するの要を見ない。故に本項に於ては、マルクスがリカアドの價值論を如何に解釋し且つ

之を如何に批判したるか、を畧説しやうと思ふ。蓋し、リカアド説に對するマルクスの見解を検することは、やがてマルクス自身の價值論の特質を裏面より物語るものなるが故に。

吾々は、リカアドの價值論に對するマルクスの見解を、其の著『資本』及び『經濟學批判』の中に於て散見することを得るのであるが、併し、マルクスの遺稿にしてカアル・カウツキーによつて出版せられたる『剩餘價值に關する諸學説』、殊に其の第二卷及び第三卷に於て、最も詳細なる纏まれるリカアド批判がなされて居ると信するが故に、余は之を參考してマルクスの所説を研究するであらう。但し該書は可なり大部なるが故に、その詳細なる紹介は暫らく後日に譲り、此處には最も重要なと思惟さるゝものに限るであらう。

先づマルクスは、リカアドの所謂相對價值に二義あることに就て、次の如く述べて居る。

『……貨物の現在又は過去の相對價值を決定するものは、勞働が生産するであらう所の、貨物の比較的分量である、……』(こは、リカアドの文章を引用せるものなり——譯者註)

『相對價值』とは、此處では、勞働時間によつて決定されたる交換價值の意に外ならない。併し相對價值はもう一つ他の意味をも有つことが出来る、即ち一貨物の交換價值を他の貨物の使用價值で言ひ表はす場合である、……(例へば次の如くリカアドが言つて居る場合の如し)¹⁾

『二つの貨物が其の相對價值に於て變動する、其時に吾々は、其の何れに於て此變動が眞實に起つたのであるか、を知らんことを欲する。』

『……此「相對價值」をリカアドは後に「比較價值」とも呼んだ。……』²⁾

1) 譯者補入

2) Karl Marx, Theorien über den Mehrwert (herausgegeben von Karl Kautsky), II. S. 9.

斯くてマルクスは、第二の意味に於ける相對價值は第一の意味に於ける相對價值の變動なくば變動せざること、及び第一の意味に於ける相對價值の變動あるも、それが兩貨物について同じ方向で同じ大さだけ變動するならば、第二の意味に於ける相對價值は變動せざること、を述べたる後に次の如く言つてゐる。

『……此の後の相對價值(第一の意味に於ける相對價值即ち貨物に實現されたる勞働時間によつて決定さるゝ交換價值の意味に於ける相對價值を指す。——譯者註)は、第二の意味に於ける即ち一貨物の交換價值を他の貨物の使用價值で又は貨幣で實際に表示するといふ意味に於ける相對價值に比較さるゝときは、『絕對價值』として現はれる。だからリカアドに在つては、第一の意味に於ける『相對價值』は『絕對價值』といふ言表はし方となるのである。

『余が讀者の注意を惹かんことを欲する所の研究は、貨物の相對價值の變動の結果に關するものであつて、その絕對價值のそれに關するものではない……』

『此『絕對價值』をリカアドは他の場所で『眞實價值』又は單に價值とも名付けた。¹⁾』

リカアドの所謂二種の相對價值の意義及びその絕對價值又は眞實價值なる語との關係に對するマルクスの見解は、以上述ぶる如くであるが、彼はリカアドが所謂第二の意味に於ける相對價值即ち比較價值に就ての研究に重きを置き、第一の意味に於ける相對價值即ち絕對價值の研究を等閑に附したることに對して、次の如く言つて居る。

『……リカアドに對して、彼が此の『眞實價值』又は『絕對價值』を極めて屢々忘却し而してたゞ

1) Marx, a. a. O., S. II.

『相對價值』又は比較價值に拘泥せることが、非難さるべきである。』^{o1)}

是に由れば、マルクスは、リカアドがマルクスの所謂狹義の意味に於ける價值なる概念に對して殆ど説明を加ふることなく、單にマルクスの所謂交換價值を説明することを以て足れりとなしたることを非難して居ることが明かである。蓋し、マルクスに従へば、價值は交換價值の實質又は根源をなすものであり、從て交換價值は價值を外部に表示するものたるに過ぎないが故である。

次に吾々は、リカアドに依つて勞働價值論に加へられたる『修正』論に對するマルクスの意見を見るであらう。

彼は先づ、

『……リカアドが固定資本と流動資本との區別を、資本の種々異なる回轉時間に求めたることは……大なる功績として認めらるべきである。』^{o2)}

と謂ひ、更に續けて、

『吾々は先づ此等の區別其物を觀察し……然る後に、如何にして彼が此等を……「相對價值」に變動を齎らすものと看做すに至りしや、を觀察するであらう。』^{o3)}

と謂つて居る。

斯くてマルクスは、リカアドと共に、同一額の資本も之を構成する固定資本と流動資本との割合に相違あること、及び固定資本の耐久力の程度に差異あること等を認め、次に然らば如何にして此等の相違が貨物の相對價值に影響するや、に對するリカアドの所説の検討に進んでゐる。曰

1) Marx, a. a. O., S. 12.

2) Marx, a. a. O., S. 18.

3) Marx, a. a. O., S. 18.

く。

『——如何にして此等の各相違が、此等の貨物の相對價值に於ける變更を齎らすや。リカアドは先づ言ふ、何故なれば此等の相違及び差異が「貨物の相對價值の不同を惹起する原因として、貨物の生産に必要な労働量の多少といふことの以外に、他の一原因を引入れる——此原因とは労働の價值の騰貴又は下落を指す——」からである、と。

『而してこは如何にして證明さるゝや。……』

『即ちこは、同一大きさの二つの資本を異れる産業部門に使用するに當つて、其の一つの資本は主として固定資本より成り、而してたゞ僅かの部分が「労働維持に用ひらるゝ」資本より成るのみなるに反し、他の資本に在ては其の正反對である、といふやうな場合に起るのである。……貨物の價值は如何にして此等の事情によつて影響さるゝや。そは（實は）それによつては全く影響されないのである。影響さるゝものは両方の場合に利潤なのであるが¹⁾。』

そこでマルクスは、假設例により又リカアドの掲げたる例を引用して、貨物の價值が、資本の構成及び資本の耐久力に差ある場合に、賃金の騰貴又は下落によつて影響さるゝとのリカアドの説明を紹介し、且つ之に批判を加へてゐる。今之を詳しく述ぶことは紙面が許さないから、余はマルクスの擧げたる一例を示して略説するに止むるであらう。彼は曰く、

『例へば自分の資本のたゞ五分の一を可變資本に放下する所の人は、——賃金及び剩餘價值率が同一であるならば、——剩餘價值率が二〇パーセントのときは、一〇〇の資本に對してたゞの

四の剩餘價值を生産することが出来るのみである、之れに反し、五分の四を可變資本に放下する所の人は、剩餘價值率が同一ならば、一〇〇に對して一六の剩餘價值を生産するであらう。兩者に對する平均利潤は $\frac{16+4}{2}$ 即ち一〇パーセントであらう。これリカードの殊に論せんと欲する場合である。從て兩者が生産價格で賣るとするならば、各人はその貨物を一一〇に賣るであらう。扱て賃金が例へば其の以前の額の二〇パーセント丈騰貴するとせよ。以前は一人の賃金が一磅であつたが、今は一磅四志になつたとせよ。第一の資本家は、以前と同じく一〇〇磅の資本の中八〇磅を不變資本に放下しなければならぬ、……而して彼が使用せる二〇名の勞働者には二〇磅の外に四磅をより多く放下しなければならぬ。從て彼れの資本は今や一〇四磅になる而して、勞働者はより大なる剩餘價值の代りにより小なる剩餘價值を提供するが故に、彼れには一一〇磅の中たゞの六磅の利潤が残るのみである。一〇四磅に對する六磅は五パーセント二三分の一〇となる。之れに反して、八〇名の勞働者を使用せる所の他の人は、一六磅だけより多く支拂はなければならないであらう。從て彼は一一六磅放下しなければならぬ。從て彼が一〇磅で賣らなければならないとするならば、彼は利得の代りに六磅の損失をしなければならぬであらう。併し斯かる場合は、平均利潤が、資本家によつて放下されたる勞働賃金と彼自身によつて生産されたる剩餘價值との割合を修正したるが故にのみ、起るのである。

『リカードは、一〇〇磅の中八〇磅を賃金に放下する所の人が、一〇〇磅の中二〇磅だけを賃金に放下する人の四倍の利潤を取得しないが爲めには、如何なる變化が發生しなければならぬか

といふ重要な現象を研究しないで、此等の大なる差(利潤間の)が平均されたる後に、——(從て一定せる利潤率の下に於て)——此利潤率の各變化が、——(例へば賃金の騰貴によつて惹起されたる)——一〇〇磅で多くの労働者を使用せる人を、一〇〇磅で少しの労働者を使用せる人以上により、甚しく變せしむること、及びそれ故に——利潤率を同一ならしむるならば——一方の人の貨物價格は騰貴し、而して他方の人のそれは下落しなければならぬといふことが如何にして發生するかといふ第二次的の問題を研究してゐる。¹⁾

又曰く、

『……資本の耐久力の程度が種々ある結果として、或は「一組の貨物が市場に持出され得るまでに經過しなければならない所の時間がある結果として」、相對價值に變更が生ぜしめらる、とリカアドが言つて居るのは誤謬である。價值が異つてゐるにも拘らず、同一なる、而して労働時間によつてのみ決定されたる此等の價值と異なる、生産價格を案出する所のものは、寧ろ一般利潤率の假説である。』²⁾

『……資本は、その大さに比例して價值を、從て剩餘價值を、從て利潤を生産するのではない。若しこれが事實だとするならば、價值とは異なる所の生産價格が存在しなければならぬ。』³⁾

『……彼(リカアド)を指す——譯者註が……(其の修正論に於て)事實上證明したる唯一の事柄は、貨物の價格は、それが一般利潤率によつて決定され居る限り、貨物の價值とは全く別種のものであるといふことである。』⁴⁾

1) Marx, a. a. O., S. 22-23.

2) Marx, a. a. O., S. 32-33.

3) Marx, a. a. O., S. 33-34.

4) 譯者補入

5) Marx, Theorien über Mehrwert, S. 37.

以上引用せる所によつて觀れば、資本の構成及び資本の耐久力に差あることが、賃金の騰落によつて、貨物の價值に労働の分量といふこと以外の變動原因を與へる、このリカアドの『修正』論は、彼が平均利潤或は一般利潤なる概念を其の價值論に採用せんとしたるが爲めに自然的に導き出されたる議論であるが、實はかゝる『修正』を施せることに依つて、純粹なる労働價值論は根本より覆され、而して新たな生産價格論¹⁾が生れ出たのである、とマルクスが思考したることは明かであらう。従てマルクスの意見に従へば、リカアドは『修正』によつて、根本的に相容れざる二個の見解を調和し得ざりしのみならず、終に出發點に於て抱懷せし労働價值論を拋棄せざるを得ざることゝなつたのである。

惟ふにこは極めて正當なる見解であらう。蓋し、單純なる労働價值の理論と平均利潤を其の構成要素とする生産價格の理論とは、根本的の差異をもつて居るが故である。前者は價值を本體的に又論理的に決定せんとするに反し、後者は之を外形的に又實際的に決定せんとするものである故にリカアドにして其の價值論を矛盾なく論述せんと欲するならば、マルクスの言へるが如く、次のやうに言うべきであつたらう。

『第一、同一大さの資本は不等の價值を有する貨物を生産す、而して其故に、そは不等の剩餘價值又は利潤を生ずる、何故なれば、價值は労働時間に依つて決定せられ、そうして一資本が實現する所の労働時間の分量は、資本の絶對量に依らずして、可變資本即ち賃金に放下されたる資本の量に依つて定まるから。』

1) 生産價格 (Produktionspreis) とはマルクス特有の語であつて、普通には生産費又は自然價格と謂はれてゐる。

『第二、假ひ同一大さの資本が同一の價值を生産するとするも、其の流通過程の長短に従て、それが等量の支拂はれざる勞働を所有し而して之を貨幣に變形することが出来る所の時間が異つて居る。従て此事は、同一大さの資本が各種の生産部門内に於て一定の時間の内に生じなければならぬ所の、價值、剩餘價值、及び利潤に於ける第二の差異を發生せしめる。』

『だから、例へば一年の間に、資本に對する幾プロセントといふ風にして利潤が等一であり、従て同一大さの資本が同一時間内には同一の利潤を生ずべきものであるとするならば、貨物の價格はその價值とは異つて定まらなければならぬ。』

斯くて要するに、貨物の價值はそれに含有され居る勞働の分量に正確に比例して定まるものである、といふ議論から出發したる以上、飽くまで之を維持すべく、中道に於て別種の價值論又は價格論を採用して前者を不徹底に終らしむるが如きは不可である、といふのがマルクスの結論であつて又同時に彼れの價值論の特質をなすものである、と解しても大過はないであらう。

たゞ吾々の看過すべからざることは、マルクスと雖も決して利潤率平均の事實を無視したのではないといふことである。彼は『資本』第三卷に於て此事實を説明し且つ生産價格の議論をも取扱つて居る。然らば『資本』第一卷に於ける勞働價值論と第三卷に於ける生産價格論との間には如何なる關係があるであらうか。余は小泉氏の考へらるゝ如く、マルクスも、リカアドと同じく、一般利潤の現象を見るに及んで『單純素朴なる勞働價值説の取るべからざる所以を覺』つて、『價值とは異なる生産價格に到達』したのであると、解することは出来ない。余は寧ろ次の如く解する

方がより適切ではなからうか、と思つてゐる。(餘白なきを以て結論のみを掲げるであらう)。

マルクスがなせる生産價格の論は、貨物の日常の個々の取引に當つて、其の交換割合は實際上如何に定められつゝあるか、といふことを外形的に説明せんとせるものであつて、これは決して價值の本來の一般的且つ實體的法則である(とマルクスが信ずる)所の勞働價值論を修正することに依つて生れ出でたのでもなく、又之を排除するものでもないのである。換言すれば、マルクスは勞働によつて測定されたる各貨物の本來の價值が、實際の貨物取引に當ては如何なる程度の變更を受けつゝあるか、又其の理由は如何、といふことを明かになさんが爲めに、生産價格の議論を用ひたのであつて、後者は前者の存在を前提として始めて有意義となると同時に、前者は後者によつて何等の影響を受けるものではない、といふことになるであらう。

(八) 結

論

以上述ぶる所に依つて、余はリカアドの價值論の特質とマルクスの價值論のそれとを説明し了へたのであるが、今驟て此等を比較考量するときは、吾々は、両者の特質の間に截然たる區別の存在せることを感ぜざるを得ざると同時に、又其間に密接なる關係の存在せることをも會得し得るのである。

リカアドは、勞働價值論を以て出發點となし、而して或る程度まで之を進展せしめた。併し彼は終に之に『修正』を加へざるを得なくなつたのである。彼は此『修正』がかの勞働價值論に本質的

の動搖を惹起したとは思つてゐないやうである。而かもこは、實は勞働價值論に對して致命的の打撃を加へた、そして生産價格論といふ新たな價值論を生んだ、こは勞働價值論とは似ても似つかぬものである。茲にリカアドは此迄辿り來れるとは別なる新道を進むことゝなつた。然るにマルクスに在ては斯かる變改は絶對に起らなかつた。彼れの議論は、リカアドに於けると同じく、純粹なる勞働價值論に始まつたが、リカアドと異り之を最後まで維持することが出來た。マアシャルの謂へる如くマルクスはリカアドを誤解したのではない。マルクスはリカアドを正當に解して居た——其の修正論や修正後の議論をも——、而かも彼はリカアドには従はなかつた。リカアドとマルクスとの價值論上に於ける連絡と乖離とは大様かくの如きものである。

然らば、リカアドとマルクスとの間の斯かる乖離を惹起せしめたる原因は何であるか。曰く、リカアドが其の勞働價值論に施したる所の『修正』である。然らば其『修正』は何故爲されたのであるか。曰く、彼が平均利潤の現象を、即ち同一額の放下資本に對しては同一額の利潤が支拂はるゝ或は支拂はるゝ傾向がある、といふ事實を觀て、之を價值構成論に採用せんとしたるが爲めである。然らば次に、リカアドをして一般利潤又は平均利潤なる現象を其の價值論に採用するに至らしめたるものは何であるか。曰く、現在の資本家的經濟組織の下に發生しつゝある所の諸現象を——其の善きと惡しきとに拘らず——是認せんとするの、或は少くとも此等を已むを得ざるもの若くは動かすべからざるものなりと看做さんとするの、彼れの資本家的立場即ち是れである。更に然らば、マルクスをして、平均利潤なる現象は之を認めつゝも、而かも尙ほ之を其の價值論に

採用するの必要を感じせしめざりしものは、何であるか。口く、現在の經濟組織の下に起りつゝある諸事實を、其の善惡に拘らず、何等證明の必要がない所の公理であるかの如く看做すことをなさず、寧ろ他の見地に立つて此等を解剖し批判することが出来るし又かくすることが必要であるとなす所の、マルクスの社會主義的立場即ち是れである。

是に於て乎、吾々は、リカアドとマルクスとの價值論の乖離が、社會の經濟組織に對する彼等の立場の相違に其の源を發して居る、との斷案を下すことが出来るであらう。

余は此斷案を證明せんが爲めに、極めて分り易き例を擧げて本論文を終るであらう。分り易き例とは、剩餘價值といふ言葉と利潤といふ言葉とに對するリカアドとマルクスの見方の相違のことである。

マルクスに従へば、剩餘價值とは、要するに勞働に依つて新たに生産されたる價值と、勞働力の價值との差額の意である。換言すれば剩餘價值は、生産物の價值の中、勞働者に對する賃金が支拂はれたる後に尙は残る所の部分である。從て其の大きさを考へる場合には、必らずや勞働者に支拂はるゝ價值(即ち賃金)、換言すればマルクスの所謂可變資本、の大きさの比を求めなくてはならぬ。かくてマルクスの所謂剩餘價值率とは、剩餘價值の不變資本に對する比率を指示するものに外ならないのである。併し乍ら、此剩餘價值なるものは資本家の手に残るものであつて、取も直さず其の所得を構成するものである。從てこは實質上利潤と同一物である。而かも利潤なる語はマルクスの言へるが如く、常に、資本家によつて放下されたる全資本を對照としての概念

であつて、之を對照とする時に始めて意義を生ずるものである。かくてマルクスの所謂利潤率とは、常に剩餘價值の全資本に對する比率を指示するものに外ならない。乃で利潤と剩餘價值とは、實質上は同一物であるけれども、概念上は全然別個のものである、といふことは略々明かになつたであらう。マルクスは此兩概念を嚴格に區別して居るのである。彼は、貨物の勞働價值が可變資本と不變資本と剩餘價值とより成ると言つたけれども、それが可變資本と不變資本と利潤とより成るとは言はなかつた。彼は又、平均利潤が生産價格の一部をなすと言つたけれども、平均剩餘價值が其一部をなすとは言はなかつた。然るにリカードは斯の如き區別をば全然認めなかつたのである。彼は常に利潤なる言葉を使用して居た、而して後に至つて、貨物の價值は勞働と利潤とによつて決定されると言つた。

此等の相違は、リカードとマルクスとの、價值論に對する根本的見地の差異を雄辯に物語るものではなからうか。蓋し、マルクスが剩餘價值と利潤との區別を明かに認識せしことは、彼が飽くまで勞働價值の見地に立つて貨物の價值を決定し、然る後に剩餘價值を論じ、而して最後に利潤の説明に及びたることの消息を語り、又リカードが斯くの如き區別を認めないで只利潤のみを云々せしことは、彼が、勞働價值の議論を以て出發しながら、平均利潤なる眼前の事實に眩惑されて、終に之を、社會に既に存在せる分配關係を前提として始めて成立する所の、彼の生産價格の議論の犠牲たらしむるに至りしことの消息を傳ふるものであらう。かくてマルクスに在ては分配論が成立する以前に、剩餘價值論が存在し、而して剩餘價值論が成立する以前に勞働價值論が

存在して居たのであるが、リカアドに在ては、分配論が先づ存在してゐて、價值論(勞働價值論を指す)の成立を妨げ、且つ之を自己の意の儘の形(生産價格論を指す)に變化せしめた、といふ形になつてゐるのである。

然らば、リカアドとマルクスとの間に、價值論に對する根本的見地の斯かる差異を生ぜしめたるものは何であるか。取も直さず社會の經濟組織に對する両者の立場の相違是れである。資本家は、利潤の存在を前提として放資する、をうしてこれを正當なる所得なりと思つてゐる。從て資本家見地に立つ所の學者は、貨物の價值を論するに當つて、利潤なるものゝ存在を忘れることが出來ない。斯くて不知不識の間に、利潤の存在を前提とせる生産價格の論に移らざるを得なくなつて了ふ。然るに資本家といふ特種的地位に居ない人は、利潤を取得すべき資本をもたない。又利潤を當然の所得であるとも思はない。從てかゝる見地に立つ所の學者は、貨物の價值を論するに當つて、利潤なる概念に妨げらるゝことはないのである。斯くて當初の價值理論を其の正しき結論にまで徹底せしむることが出来る。而して彼等の學說に於ては、當然の順序として先づ剩餘價值なる概念が生れ、然る後にそが利潤なる別種の概念に移つて行く。リカアドは前者に屬する學者であつて、マルクスは後者に屬する學者である。余がリカアドとマルクスとの價值論の乖離は両者の立場の相違に基くといふ所以は、實に茲に存するのである。